

誰が「イスラエルに万歳三唱」と言ったのか？： 『ユリシーズ』と映画『ブルーム』

浅井 学

序

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) は『ユリシーズ』 (*Ulysses*) (1922年) の中でアイルランドの首都ダブリンの一日を描いた。その一日とは1904年の6月16日。今では主人公の名にちなんで「ブルームの日」 (Bloom' Day) と呼ばれるようになり、ジョイス愛好者や研究者に親しまれている。その100周年目の「ブルームの日」のちょうど二ヶ月前、2004年4月16日、アイルランドで『ユリシーズ』を原作とした新しい映画が上映された。Sean Walsh 監督の手による『ブルーム』 (*Bloom*) である。

文学作品を原作とする映画の常と言ってよいが、原作との違いが沢山ある。もとより、言語を媒体とする芸術を視角を主体とする芸術に翻訳する際には超え難い壁というものが存在するので、映画化の際にはどこまでも原典に忠実というわけにはいかない。また、たった一日の出来事を描いているとはいえ、『ユリシーズ』のような長大な小説の全てを映像化していたら何時間の映画になるか分からない。映画、特に商業映画では、観客が観賞に堪えうる尺というものを考えなくてはならないのだ。だから、小説の映像化にあたって種々の取捨選択や、様々な脚色は仕方のないことだろう。

しかし、一つだけどうしても筆者が違和感を覚えた点がある。それは、映画も半ばで、ブルームが「イスラエルに万歳三唱」 (Three cheers for Israel!) と声を張り上げる場面である。ブルームは、「市民」 (citizen) とあだ名される過激な民族主義者に言いがかりを付けられユダヤ人であることを罵られて、一緒にいた知り合いに酒場から連れ出される時、足を止めてこの台詞を言うのだ。

この場面が気になったのには特に個人的な理由もある。以前『英語青年』誌 (2004年10月号) に「ブルームとユダヤ人問題」という拙稿を発表した時、「イスラエルに万歳三唱」と叫んだのは (ブルームではなく) 「市民」だと書いたところ (浅井 400), 読者の方から編集部を通じて「文脈的に見て『イスラエルに万歳三唱』と叫んだのはブルームではありませんか」という質問が寄せられたからである。当該箇所は作品の粗筋を紹介しているくぐりや、特に意識して考えていた問題ではなかったため、まさかそのような指摘がくるとは思わず、読み違いをしたのかと

少々狼狽した。ここで言っている「文脈」が何を指しているのか判然とはしなかったが、「イスラエルに万歳三唱」の台詞が出てきた後で、ブルームがユダヤ人のことで「威張りちらし」, 「メンデルスゾーンはユダヤ人だったぞ, カール・マルクスもメルカダンテもスピノザもユダヤ人だったぞ。それに救世主だってユダヤ人で, その父親だってユダヤ人だったぞ」と言うので, 一見「イスラエルに万歳三唱」と言ったのはブルームということで筋が通るように見えるのは確かである。

また, 元のテキストを見てみると, 直前のところも含めて次のようになっている。

And begob he got as far as the door and they holding him and he bawls out of him:

-Three cheers for Israel! (12.1789-91)⁽¹⁾

後で詳しく見るが, he got as far as the doorのheは「市民」を指す。they holding himのhimも「市民」である。筆者は次のhe bawls out of himのheを, ある意味単純に, 前のheやhimと同じものを指すとして「市民」と取ったが, 『ユリシーズ』の場合, (理由は様々だが) しばしば代名詞はそれが指示する固有名詞を明示することなく指示対象を変えることがある。例えば, これも後で詳しく見るが, 問題の個所の少し後のところで次のような一節が出てくる。

And all the ragamuffins and sluts of the nation round the door and Martin telling the jarvey to drive ahead and the citizen bawling and Alf and Joe at him to whisht and *he* on *his* high horse about the jews [...]. (12.1796-98) (斜体は筆者)

斜体で示したhe (それからhis) は「市民」ではなくブルームを指すのだが, この一節の中でBloomという固有名詞は出てこない (それどころか, Gabler版で100行以上遡らなくては“Bloom”という単語は出てこない)⁽²⁾。この場合は誰を指すのか比較的容易に理解可能とは言え, 突然heがブルームを指しているのだ。だから, 同じ三人称の代名詞が使われているからと言って, he bawls out of himのheが「市民」からブルームに切り替わっていないとは言えないのである。判断はより大きな文脈によって行われなくてはならない。

ジョイス研究者はこのような細部にこだわるより, 大きな問題を論じたがる傾向があるためか, 論文などを読んでも, このような細部をどう読んでいるか確認するのは難しい⁽³⁾。また, あまりにマイナーな問題として目もくれていないということなのかもしれない。しかし, いかなる作品論であれ, 作品の細部の読みに基づいたものでなくてはならないなら, このような細部の解釈の白黒をつけておくということは研究の基礎作業として大切なことであろう。

以下, 本稿では, 万歳三唱を言ったのが誰かということをも文脈的に検討し, 以前の考察を補完すると同時に, 映画のようにブルームにこの一言を言わせた場合に生ずる問題点, あるいは『ユリシーズ』という作品が失ってしまうものについても合わせて考察してみたい。

1. 状況確認：酒場でのやり取り

まず、話の見通しを良くするために作品の構造や問題の個所に至る状況の説明をしておこう。問題の万歳三唱が出てくるのは、『ユリシーズ』の第12挿話である。『ユリシーズ』について詳しくない人のために言うなら、『ユリシーズ』は全部で18の挿話から成り立っており、その挿話のそれぞれに、時間、場面、(主題となる)学芸、(挿話を描くための)技法、それに下敷きとなっている『オデュッセイア』から取ったタイトルなどが決められている。第12挿話のタイトルは「キュクロプス」(Cyclops)で、キュクロプスは、オデュッセウス一行を洞窟に閉じこめてひとりずつ食べていく一つ目の巨人である。『ユリシーズ』の中では「市民」がその役を割り振られている。場所はバーニー・キアナン (Barney Kiernan) の酒場 (映画『ブルーム』ではデイヴィー・バーン (Davy Byrne) の店になっているが、デイヴィー・バーンの店は原作では、主人公ブルームが昼食を取る場所である)。ここで「市民」を始め店の常連と思われる面々が酒を飲んでいる。「学芸」は、ゴーマン＝スチュアート『ユリシーズ』計画表によれば「政治」ということになっていて、この挿話には色々なレベルの政治的話題が出てくる。「技法」は巨人文体 (Gigantism) となっているが、分かりやすく言えば誇張法である。第12挿話の語りは大きく二種類に分けることができ、一つは研究者の間で「名無しのごんべえ」(nameless one) と呼ばれている一人称の野卑な語り手による状況描写であり、もう一つはその語りに挟まれる形で出てくる様々な文体のパロディによる誇張された挿入部分である。本論ではこの挿入部分に関しては深く言及しないので、とりあえずそのようなパートが挿入されているということだけを押さえていただきたい。名無しの語り手の方は人ではなく犬だという説もあるのだが (柳瀬尚紀『ジェイムズ・ジョイスの謎を解く』)、本稿ではとりあえず人間と考えておくことにする。

さて、バーニー・キアナンの酒場で皆が酒を飲んでいるところへブルームが入ってくる。最初は当たり障りない話が続くが、アイルランドの抑圧の歴史や国/民族 (nation) の話とだんだんと雲行きが怪しくなっていく、とうとう「市民」がブルームに「お前の国はどこなんだ」と聞く。言うまでもなく、こういう質問が出ること自体「市民」がブルームを自分たちの仲間、この場合はアイルランドの同胞、とっていないことを端的に表わしている。

-What is your nation if I may ask? says the citizen.

-Ireland, says Bloom. I was born here. Ireland.

The citizen said nothing only cleared the spit out of his gullet and, gob, he spat a Red bank oyster out of him right in the corner. (12.1430-33)

アイルランドで生まれたブルームは自分の国はアイルランドだと言うが、「市民」にはそれが許せない。「ユダヤ人」であるブルームに対する「市民」の排他的姿勢は、無言で吐き出される生牡蠣みたいな痰に強烈に表わされているだろう。

こうした態度を取る「市民」が、『ユリシーズ』で描かれる時代のアイルランドにおいて特別な存在だったと言うわけではない。拙稿「ブルームとユダヤ人問題」でも言及したが、アイルランドにおけるユダヤ人の歴史について書いたLouis Hymanによれば、「ジョイスの時代のアイルランドでは、Irish Jewという考えを持ち出すだけで笑いが起こった」らしい（The mere concept of the Irish Jew raised a laugh in the Ireland of Joyce's day. (Hyman 176)）。ハイマンはそれに続けて、ダブリンのユダヤ人ジャーナリストが1906年に書いた次のような文章を紹介している。

There is an invisible but impassable barrier between Jew and Christian—a barrier which the one party will not, and the other cannot, break through. You cannot get one native to remember that a Jew may be an Irishman. The term 'Irish Jew' seems to have a contradictory ring upon the native ear; the very idea is wholly inconceivable to the native mind . . . Irish Jews feel that if they spoke of each other as Jewish Irishmen, it would meet with a cutting cynicism from the natives that the two elements can never merge into one, for any single purpose . . . There is undoubtedly a mutual estrangement between the Jews and the Irish. The Jews understand the Irish little; the Irish understand the Jews less. Each seems a peculiar race in the eyes of the other; and, in a word, the position of Jews in Ireland is peculiarly peculiar. (Hyman 176)

表れ方が極端とはいえ、「市民」のユダヤ人に対する排他的な姿勢は決して彼一人のものだけではなかったのである（「市民」の場合はさらに、IrishであるためにはGaelicでなくてはならないという民族的純粋主義も影響しているだろう）。

この後、「市民」や一緒に飲んでいる他の客は酒のお代わりを受け取るが、「市民」の痰を例外として、ブルームの返答には皆ノーコメントである。ブルームは自分に対する差別を感じ取ったのだろう、続けて次のように言う。

—And I belong to a race too, says Bloom, that is hated and persecuted. Also now. This very moment. This very instant.

Gob, he near burnt his fingers with the butt of his old cigar.

—Robbed, says he. Plundered. Insulted. Persecuted. Taking what belongs to us by right. At this very moment, says he, putting up his fist, sold by auction in Morocco like slaves or cattle. (12.1467-72)

すぐ前で見たとように、ブルームは自分の国（nation）はアイルランドだと言った。そして今、自分の国はアイルランドだが、民族（race）としては、「嫌われ迫害されている」民族、ユダヤ人に属していると言っている。nationにも「民族」という意味があるから話が少しややこしくなる

のだが、要するにブルームは nation と race を使い分けることによって自分はユダヤ系アイルランド人 (Jewish Irishmen) であると自己規定しているのだ (これがアイルランドでは失笑を買う表現、つまり認められない表現であったという話は上でしたとおりである)。

実は、ブルームがユダヤ人と言えるかどうかはかなり微妙な問題で、第16挿話ではブルーム自ら自分はユダヤ人ではないと言っている⁽⁴⁾。だから、ここで押さえておくべき大事なことは、ブルームだってここでこんなことを言いたくて言っているわけではなく、周りの差別的な言動や雰囲気追い込まれてこう言っているのだということである。ブルームの気持ち、本当に言いたいことは、自分は確かにユダヤ人の血を引くけれど、アイルランドに生まれたのだから自分の国は君たちと同じアイルランドだ、これに尽きるだろう。

さて、上の台詞に対して「じゃあ、男らしく力で対抗したらどうなんだい」(Stand up to it then with force like men) (12.1475) と客の一人ジョン・ワイズ・ノーラン (John Wyse Nolan) に言われて、ブルームはジョイス研究者の間で有名な台詞を言う。

-But it's no use, says he. Force, hatred, history, all that. That's not life for men and women, insult and hatred. And everybody knows that it's the very opposite of that that is really life.

-What? says Alf.

-Love, says Bloom. I mean the opposite of hatred. I must go now, says he to John Wyse. Just round to the court a moment to see if Martin is there. If he comes just say I'll be back in a second. Just a moment. (12.1481-87)

前の引用のブルームの台詞や、この引用の「そんなもの何の役にも立ちほししない。力とか、憎しみとか、歴史とか。そんなものはみんな。男にも女にも、侮辱とか憎しみとか、そんなもの大事なことじゃない」などの台詞は、この時まさに進行中の妻の浮気という、もう一つの文脈も踏まえて慎重に検討しなくてはならない大事なところなのだけれど、長くなるのでここでは踏み込まない。今の話の流れの中で大事なのはむしろ、ブルームが、「マーティンが来ていないか裁判所のところまでちょっと行ってくる」と言って外に出て行く理由だろう。「(大事なものは) 愛です」という台詞は、確かに忘れてはいけない大事なことだとは思うけれど、恥ずかしくてなかなか実際には口にできない言葉である。それに、このような抽象的な一言で全ての問題の片が付くほど現実には甘くないし、そんなことが分からないほどブルームは青臭い人間でもない (彼は当年38歳の苦労人だ)。どういう理由で口にしたにせよ、ブルームは、自分で言ってしまったこの台詞に自分でも少し恥じらいや照れ臭さを感じ、友人との待ち合わせの件を言い訳にして席を外すのである⁽⁵⁾。ここにはブルームの愛すべき性格の一面がよく表れているだろう。

しかし、この愛すべき行動が、とんでもない誤解を生む原因になる。ブルームが出ていった後、酒場の客の一人であるレネハン (Lenehan) が「やつがどこに行ったか俺は知っているぜ」(12.1548) と言い出し、裁判所に行くと言うのは嘘で、実は競馬で穴馬を当ててその配当金を取

りに行ったのだと皆に吹聴するのである。この話が間違いだということは先の説明からお分かりいただけると思うが、レネハンがこんなことを言い出すのには少し訳がある。

事の次第はこうだ。この日の午前、『ユリシーズ』の挿話で言うと第5挿話で、ブルームが新聞を脇の下に挟みながら歩いていると、知り合いのバンタム・ライアンズ (Bantam Lyons) が近寄ってきて、今日の競馬に出走する馬のことを知りたいので、ちょっと新聞を見せてくれないかと言う。ブルームは、その新聞を「あげるよ」「ちょうど捨てるつもりだったんだ」と言うのだが、この「捨てる」(throw it away)の部分をライアンズは、馬の名前のThrowawayと勘違いしてしまうのである。勝馬情報を得たと思い込んだライアンズは「思い切って賭けてみるよ」(I'll risk it) (5.541)と言いきり、急ぎ足で立ち去ってしまう。その後、Throwawayに賭けようとしているライアンズに会ったレネハンが、ライアンズからその話を聞く。レネハンには競馬の予想屋をしていて、ライアンズがThrowawayに賭けるのを止めさせるのだが、結果はThrowawayが一着となり、配当は20対1の大穴。レネハンのはてっきりブルームがThrowawayに賭けて大儲けしたものと勘違いするのである。このような誤解の積み重ねが独り歩きを始め、事実と違うことが事実であるかのように広まっていくから人の世とは恐ろしい。

さて、ブルームが不在の間に、彼が待ち合わせをしているマーティン・カニンガム (Martin Cunningham) が酒場にやってきて、ブルームがユダヤ系であることや彼にまつわる色々な噂が飛び交う。そんなところにひょっこりブルームが戻ってくる。以上が問題の個所に至るおおまかな文脈である。

2. ブルームの帰還と問題の個所

さて、ここから「イスラエルに万歳三唱」が出てくるまでのくぐりを探検するが、話の流れをしっかりと押さえるためにテキストを少し丁寧に見ていきたい。

-I was just round at the courthouse, says he, looking for you. I hope I'm not

-No, says Martin, we're ready.

Courthouse my eye and your pockets hanging down with gold and silver. Mean bloody scut. Stand us a drink itself. Devil a sweet fear! There's a Jew for you! All for number one. Cute as a shithouse rat. Hundred to five. (12.1756-61)

「ちょっと裁判所の辺りまで言ってきたんだよ、君[=マーティン・カニンガム]を探しにね。待たせたんじゃないかと・・・」というブルームの言葉を受けて、名無しの語り手は、「裁判所だって。お前のポケットは金貨やら銀貨やらでずっしりだろうが。けちん坊が。俺達に一杯おごれってんだよ。けっ。まったくユダヤ人だぜ。自分のことしか考えやがらねえ。便所のネズミみたいに抜け目がねえ。5で100か」と言う（もちろん、これは名無しの語り手による語りの部分で、

この台詞をブルームを含めた酒場の客が聞いているわけではない⁽⁶⁾。アイルランドや英国では酒場ではみんなでおごりあって飲むのが基本的な飲み方である。いわんや、金が入るのにおごらない、あるいは、入ったのにおごらないというのは基本的に嫌われること、分かりやすく言えば、とんでもなくけちな奴だと見なされることなのである。そして、ブルームがこういう風にけちなのはユダヤ人だからだという語り手の考えは、「市民」やその場に居合わせている人間の思い(差別意識)を代表している。この見方が、ユダヤ人イコール「けち」「吝嗇」「守銭奴」という、伝統的なユダヤ人に対する偏見の一つに基づいていることは言うまでもない。

さて、ここで「市民」がブルームに対して唐突に「誰にも言うんじゃねえぞ」というセリフを言い放つ。

-Don't tell anyone, says the citizen,

-Beg your pardon, says he.

-Come on boys, says Martin, seeing it was looking blue. Come along now.

-Don't tell anyone, says the citizen, letting a bawl out of him. It's a secret.

And the bloody dog woke up and let a growl.

-Bye bye all, says Martin.

And he got them out as quick as he could, Jack Power and Crofton or whatever you call him and him in the middle of them letting on to be all at sea and up with them on the bloody jaunting car.

-Off with you, says Martin to the jarvey. (12.1762-71)

当然ブルームは何のことだか分からないので「なんですって」(Beg your pardon)と聞き返す(突然heと出てくるが文脈的にはブルームとしか考えられない)。マーティンは雲行きが怪しくなってきたのを察知し、ブルームを連れて立ち去ろうとする。「市民」はふたたび「誰にも言うんじゃねぞ、秘密なんだからな」と声を張り上げて言う(letting a bawl out of him)。マーティンは急いでパワーとクロフトンとブルームを外に連れ出し馬車に載せ、御者に「出せ」と言う。ブルームはletting on to be all at sea, つまり「何が何だかさっぱり分からぬといったふりをして」と名無しの語り手によって描写されるけれど、競馬で大穴を当てたと誤解されているなどとは知らぬブルームにとっては、「ふり」ではなく本当に何が何だかさっぱり分からない状況なのである。

テキストでは、ここで第12挿話の特徴の一つとなっている文体パロディによる挿入部分があるのだが、本稿の論点とは関係ないので飛ばして、いよいよ「万歳三唱」の個所にさしかかる。

But begob I was just lowering the heel of the pint when I saw the citizen getting up to waddle to the door, puffing and blowing with the dropsy, and he cursing the curse of Cromwell on him, bell, book and candle in Irish, spitting and spatting out of him and Joe and

little Alf round him like a leprechaun trying to peacify him.

-Let me alone, says he.

And begob he got as far as the door and they holding him and he bawls out of him:

-Three cheers for Israel! (12.1783-91)

名無しの語り手が酒を飲み干す時「市民」が立ち上がってよろよろドアの方に行こうとするのが見える。「市民」はふうふうハアハアしながら、ブルームに対して「クロムウェルの呪いがあらんことを、鐘と本とロウソクにかけて」(he cursing the curse of Cromwell on him, bell, book and candle)と言う。「クロムウェルの呪い」とはクロムウェルがアイルランドで行ったような残酷行為のことを指し、「鐘と本とロウソクにかけて」は教会が信者に破門宣告をする時に使う言葉である(Gifford 378)。これは罵り言葉としてはかなり激越なものなのだが、「アイルランド語で」(in Irish)言われているので、ブルームの耳まで届いたとしても、彼に理解できたかどうかは少々怪しい。しかし、効果の程はともかく、国粹的民族主義者「市民」らしい言動とは言えるだろう。そんな「市民」を酒場で一緒に飲んでいたジョーとアルフがとりまき、なだめようとする。しかし、「市民」は「ほっといてくれ」(Let me alone)といって制止を振り払い、ドアのところまでやって来る。ジョーとアルフは「市民」を押さえるが、「市民」は「イスラエルに万歳三唱」と叫ぶ。もちろん、万歳三唱と言っても、辛辣な嘲りの気持ちで叫ぶのだ。冒頭でも述べた通り、ここが映画『ブルーム』や『英語青年』誌に質問を寄せてきた読者と特に解釈の違う問題の個所なのだが、議論は後回しにして、とりあえず筆者の読み方で文脈を追う作業を続けさせてもらいたい。

Arrah, sit down on the parliamentary side of your arse for Christ' sake and don't be making a public exhibition of yourself. Jesus, there's always some bloody clown or other kicking up a bloody murder about bloody nothing. Gob, it'd turn the porter sour in your guts, so it would. (12.1792-95)

名無しの語り手は、ブルームに突っかかっていく「市民」の姿を見て、「議会の席に着いている時みたいにおとなしく座っておけよ、自分をさらし者にするんじゃない。まったくいつだって糞つたれなつまんねえことで糞つたれな殺人を引き起こす糞つたれなアホがいやがる」と考える。

And all the ragamuffins and sluts of the nation round the door and Martin telling the jarvey to drive ahead and the citizen bawling and Alf and Joe at him to whisht and he on his high horse about the jews and the loafers calling for a speech and Jack Power trying to get him to sit down on the car and hold his bloody jaw and a loafer with a patch over his eye starts singing *If the man in the moon was a jew, jew, jew* and a slut shouts out of her:

誰が「イスラエルに万歳三唱」と言ったのか？

-Eh, mister! Your fly is open, mister! (12.1796-802)

ドアの周りには「国中のぼろを纏った浮浪人たちや淫売たち」(all the ragamuffins and sluts of the nation)が集まってきて(もちろん誇張表現である), マーチンは御者に「やってくれ」といい、「市民」はわめき叫び(bawling), アルフとジョーは「市民」に「しっ、静かに」といって黙らせようとし、ブルームはユダヤ人のことで「威張りちらし」(on his high horse), 浮浪者が演説をぶてと囃し立て、ジャック・パワーはブルームを馬車の上で座らせ黙らせようとする。ブルームは第16挿話の中で、「市民」が自分を「ユダヤ人」と罵ったために、彼の神様もユダヤ人だったと言ってやったと述べているが(He called me a jew and in a heated fashion offensively. So I without deviating from plain facts in the least told him his God, I mean Christ, was a jew too and all his family like me though in reality I'm not. (16.1082-85)), 筆者の考えでは、「市民」が「ユダヤ人」と罵るのはこの喚き叫んでいる場面である。そして、ブルームが「ユダヤ人のことで威張りちらし」というのは、自分のことをユダヤ人と言われて、例えば「それなら言わせてもらうけれど、ユダヤ人には優秀で偉大な人間がいるじゃないか」と言い返したことを指しているのだと考える(このあたりジョイスははっきり書いてくれていないので推量するしかない)。

そして、ブルームはこうした文脈の中で「メンデルスゾーンはユダヤ人だったぞ、カール・マルクスもメルカダンテもスピノザもユダヤ人だったぞ。それに救世主だってユダヤ人で、その父親だってユダヤ人だったぞ」「お前の神様はユダヤ人だったんだぞ。キリストは俺同様ユダヤ人だったんだぞ」という台詞を話すのだ⁽⁷⁾。

And says he:

-Mendelssohn was a jew and Karl Marx and Mercadante and Spinoza. And the Saviour was a jew and his father was a jew. Your God.

-He had no father, says Martin. That'll do now. Drive ahead.

-Whose God? says the citizen.

-Well, his uncle was a jew, says he. Your God was a jew. Christ was a jew like me. (12.1803-09)

マーティン・カニングムに「[キリスト]には父親がいなかったぞ」と言われて、「じゃあ、彼のおじさんはユダヤ人だったぞ」と言うあたり、ああ言えばこう言うブルームの性格が良く出ていて笑えるところでもあるが、こういう状況下では火に油だろう。いずれにせよ、以上のような流れが、この部分に関する筆者の読み方である。

さて、問題の個所に戻ろう。もし he bawls out of him (12.1789-90) の he をブルームと取って、「市民」ではなくブルームが「イスラエルに万歳三唱」と叫ぶと読んだ場合、最もまずいのは、ブルームから見てユダヤ人に関する文脈が前のところに無いのに彼が「イスラエルに万歳三唱」

と叫んだことになるという点である。もちろん、すでに見たように、もっと前のところでブルームはユダヤ人とされ、あるいはユダヤ人と無理に認めさせられ、「市民」らの嘲りの対象になっている。しかし、酒場に戻ってからの「市民」の言いがかり（「誰にも言うなよ、秘密なんだからな」）に関しては、ブルームは何のことを言っているのか皆目見当がついていない。「市民」は、名無しの語り手同様、ブルームが競馬で一儲けし、そのことを内緒にして酒をおごらないのはユダヤ人だからだと思いながらこう言っている。一方、ブルームはここで自分の「ユダヤ人性」のことを言われているとは思っていない。「誰にも言うなよ、秘密なんだからな」から自分の「ユダヤ人性」の話に結びつけるには相当の思考の飛躍が必要なのである。そういう文脈でいきなり「イスラエルに万歳三唱」と言うのは、どう考えても話の辻妻が合わないだろう。

また、「市民」はドアの方に近づきながら「クロムウエルの呪いがあらんことを、鐘と本とロウソクにかけて」と言っているが、仮にこの呪いの言葉をブルームが聞いてアイルランド語を理解したにしても、ここから自分がユダヤ人であることを攻撃されているとは判断できないだろう。

やはり、話しの流れとしては、「市民」が「イスラエルに万歳三唱」と言ってブルームを嘲り、その後ブルームのことをユダヤ人と罵る。それによって、「黙っているよ」とは結局何のことか分からないけれど、自分が「ユダヤ人」であることに対して攻撃を受けているのだとブルームが理解し、「市民」に言い返す。こちらの方が遥かに自然な読み方なのではないだろうか。

3. 映画『ブルーム』における設定の変更と問題点

前にも書いたが映画では、「イスラエルに万歳三唱」をブルームが口にしている。すでに説明したように、原作どおりではこの解釈を適用すると話の辻妻が合わなくなる。そのためか、映画ではもともと名無しの語り手の台詞だったものを、多少アレンジして「市民」に言わせている。

Courthouse me eye and your pockets dangling there with gold and silver. Typical jew for you!
All for number one. Cute as a shithouse rat. That's what you are. Hundred to five. (*Bloom*)

原作では、この時点でブルームはまだ「黙っているよ、秘密なんだからな」の意味が全く分からなくて当惑しているところだが、映画ではここで、ブルームがユダヤ人であることに言及しながら「市民」が面と向かってブルームを罵るのである。確かにこのように設定を変更すれば、「イスラエルに万歳三唱」をブルームが口にしても表面上の違和感はなくなる。むしろ、話が単純になり観客にとっては物語に付いていきやすくなるかもしれない。しかし、この変更のために、原作の非常に重要な要素、あるいは、ジョイスの作家としての工夫が失われてしまっている。

「お前の国はどこだ」と「市民」から聞かれた後の受け答えから分かるように、ブルームはユダヤ系の血を引いているとは言えるけれど、別に「ユダヤ人」として「アイルランド人」と一線を画して生きたいと思っているわけではない（「市民」のような人間とは一線を画したいと思っ

ているだろうし、置かれた複雑な境遇のためにアイルランドの人々を外側の視点から皮肉に観察することはあるけれど、それはまた別の話である)。仮に「ユダヤ系」という限定が付くにしても、あるいは付けられるとしても、「(僕の国は)アイルランドです。僕はここで生まれました。アイルランドです」という言葉に表わされているように、彼は自分を「アイルランド人」だと思っている。また、ブルームは、人並みに熱くはなっても、怒りに我を忘れて後先を考えない言動にでる、いわゆる「切れる」ような人間ではない。そのようなブルームが、たとえ挑発されたにしても「イスラエルに万歳三唱」と積極的にアイルランドに対して一線を画しユダヤ側に身を置くような台詞を口にするだろうか。今の場合、それはむしろユダヤ人をアイルランドから排除したいと思っている「市民」のような偏狭な民族主義者の辛辣な皮肉、あるいは嫌みとして最も相応しい台詞だろう。言い換えるなら、「イスラエルに万歳三唱」というこの台詞は、民族主義者「市民」の偏狭な差別意識を最もドラマチックに描き出すために書き込まれている一言なのである。

この台詞を「市民」ではなくブルームが話すようにするという映画『ブルーム』での改変が、どのような経緯で行われたかはよく分からない。この方が映画としては分かりやすいという意図的な変更だったのかもしれないし、この台詞をブルームのものだと単純に読み違えて、辻妻が合うように文脈を整えたのかもしれない。しかし、原作ではこの場面の大きな要となる一言が、映画では「市民」の口からブルームの口に移されたことにより、ブルームの人物像に影響を与え、原作でこの台詞が持っている重みが完全に消えてしまっているのだ。

予め『ユリシーズ』を読んでおかななくては話についていくのが大変だという難点はあるものの、『ブルーム』は全体として『ユリシーズ』を良く理解した優れた映画だと思う。それだけにいっそう、「イスラエルに万歳三唱」の一言を話す人間の変更が惜しいと思われるのである。

結語

冒頭でも言ったように文学作品をそのまま映像化するのは難しい。だから、映画が原作と違うことをことさら批判するのはほとんど意味がない。しかし、そうした違いが原作のテキストの細部に対して新鮮な問題意識を喚起してくれるなら、両者を比較して検討してみることに意味があるだろう。本稿で取り上げた「イスラエルに万歳三唱」の個所は、そうした例の一つである。

注

- (1) 『ユリシーズ』からの引用は全て *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition* からのもので、引用の後に挿話番号と行番号を示す。
- (2) よりの確に言えば、ブルームが酒場の外へ一時退出して再び酒場に戻って以降、名無しの語り手はブルームを指す時 Bloom という固有名詞は使わず、三人称の語りの部分では基本的にブルームを he, his, him という代名詞で指し示す。これは本稿の後の方で解説する理由により語り手がブルー

ムに対して腹を立てているためと考えられる。

- (3) Harry BlamiresやNeil R. Davisonは「イスラエルに万歳三唱」を「市民」の台詞としている(Blamires 133, Davison 218)。
- (4) ユダヤ教法規の規定では、ユダヤ人とは「ユダヤ人の母親から生まれたもの、或いはユダヤ教に改宗したもの」となっているが(佐藤16)、ブルームの母親がユダヤ人と言えるかどうかテキストでははっきりしない。ユダヤ教徒だった父は(従ってユダヤ人の血を引いているとは言える)、ブルームが生まれる前にプロテスタントに改宗しており、ブルームは生まれた時プロテスタントとして洗礼を受け、カトリック教徒のモリーと結婚するためにカトリックに改宗している。また、第13挿話で分かるようにブルームはユダヤ教徒の特徴とされる割礼も受けていない。
- (5) 「(大事なのは)愛です」と言った時に、ブルームが気恥ずかしさ、決まりの悪さを覚えているという意見はGabler版普及版の序文でRichard Ellemannも言っている：“‘Love,’ Bloom is forced to say, and adds in embarrassment, ‘I mean the opposite of hatred.’” (Ellmann xii)。
- (6) Suzette A. Henkeは“‘There’s a jew for you! All for number one. Cute as a shithouse rat.’”を「市民」の台詞であるかのように引用しているが、明らかに間違いである。(Henke 150)
- (7) このブルームの台詞には実は問題がないわけではない。マルクスはユダヤ人の両親から生まれたが、ユダヤ教の信仰を捨てたばかりか、反ユダヤ主義的な態度を取るようになる。メルカダンはブルームの勘違いで、ユダヤ人ではなくイタリアのカトリック教徒である。スピノザはユダヤ教の神学や神秘思想を学んで育ったが、彼の哲学思想は異端的だったためにユダヤ教団より破門され、ユダヤ人社会から追放された(いずれもGifford 378の注を見よ)。したがって、彼らはユダヤ人を擁護するために、あまり適切な例ではないのである。このように大切なところで主人公に勘違いをさせるあたりがジョイスの小説作法の面白いところである。

引用文献

- Blamires, Harry. *The New Bloomsday Book: A Guide through “Ulysses.”* 3rd ed. London: Routledge, 1996.
- Bloom. Dir. Sean Walsh. Odyssey Pictures Production. 2004.
- Davison, Neil R. *James Joyce, “Ulysses,” and the Construction of Jewish Identity.* Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Ellmann, Richard. Preface. *Ulysses.* By James Joyce. London: Bodley Head, 1986.
- Gifford, Don and Robert J. Seidman. *“Ulysses” Annotated: Notes for James Joyce’s “Ulysses.”* Rev. and expanded ed. Berkeley: U of California P, 1988.
- Henke Suzette A. *Joyce’s Maraculous Sindbook: A Study of “Ulysses.”* Columbus: Ohio State UP, 1978.
- Joyce, James. *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition.* Ed. Hans Walter Gabler. New York: Garland, 1986.
- 浅井学「ブルームとユダヤ人問題」『英語青年』150 (2004) : 398-400.
- 佐藤唯行『英国ユダヤ人』講談社, 1995.
- 柳瀬尚紀『ジェイムズ・ジョイスの謎を解く』岩波書店, 1996.

(2006年9月29日受理)

(あさい まなぶ 文学部助教授)